

再臨のキリストによる
第7福音書

インターレグナム

—二つの王国の媒介—

*THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING* **No. 7**

INTERREGNUM

II

SEIDOU 正道

目次

インターレグナム 第三部「葵」

第7福音書	3
全体の目次	4

第9章 ポール・ソロモンの予言

(1) 一九九一年に語られた予言	9
(2) 四つの特徴に対する考察	12
(3) 葵の御紋	15

第10章 奉還と恭順

(1) 慶喜が背負ったもの	21
(2) 歴史的な役割	24
(3) 師と弟子	27

第11章 二匹の獣

(1) 水戸＝六六六	33
(2) 不離の二神	36
(3) 朱子学という獣	38

インターレグナム 第四部「祈」

『ガンディー魂の言葉』より	43
-------------------------	----

第12章 明けの明星の宿命

(1) 太陽と金星	47
(2) 予言との関わり方	50
(3) 悲劇を愛する者	54

第13章 転換の福音

(1) 第六福音書の続き	61
(2) 第三の福音	63

第14章 父への祈りと星の声

(1) 父神への祈り	77
(2) ヘルメス・トリスメギストス	85
(3) イエス・キリストの霊	89

(4) 結びと円のほつれ	94
--------------------------	----

インターレグナム 第三部「葵」

第7福音書

再臨のキリストによる

第七福音書

インターレグナム

――二つの王国の媒介 \newline

七郎麿（慶喜）に対して斉昭は、

「水戸家は幕府を支えることが家の役目だ」

と言い聞かせたが、同時に

「幕府と朝廷が戦うことに至ったら、たとえ幕府への不服従を意味したとしても、皇室に対して弓を引いてはならない」

と何度も教え諭している。

マイケル・ソントン『水戸維新』より

全体の目次

第1部 星

第1章 神秘詩 超新星

——ある夜の記録

第2章 ノストラダムスの黙示録

第3章 神秘数一七

第4章 ベツレヘムの星

第5章 星が私に語ること

第2部 父

第6章 父と子

第7章 インターレグナム

第8章 陽のあたる場所

第3部 葵

第9章 ポール・ソロモンの予言

第10章 奉還と恭順

第11章 二匹の獣

第4部 祈

第12章 明けの明星の宿命

第13章 転換の福音

第14章 父神への祈りと星の声

第9章 ポール・ソロモンの予言

（ 1 ）一九九一年に語られた予言

救いの権能の奉還

本章から第3部に入る。第1部「星」、第2部「父」と続いてきて、ここから第3部の「葵」に入るわけだ。ここでテーマは、再び「救いの権能の奉還」に戻る。

とはいえ、すでに話の流れは明確になっていると言えるだろう。すなわち、

「ノストラダムスによる、一九七三年八月から始まる転換の予言」

「神秘数一七のアナグラム“七一”による、終わりと始まりの暗喩」

「父と子が同時存在している場合の、子の身の処し方」

「インターレグナム（つなぎの王国）による、二つの王国の媒介」

という、前章までに語ってきた内容によって。

となれば、もしかしたら、言うべきことは、すでに言い尽くしているのかもしれない。すでに私は蛇足の領域に、足を踏み入れているのかもしれない。

しかし「救いの権能の奉還」については、絶対に無視できない、非常に示唆的な予言が残されているのだ。私自身、自分が採るべき道を、その予言によって学んだと言っている。

だから今、これについて話さない訳にはいかないのである。

予言者ポール・ソロモン

その予言を残したのは、ポール・ソロモンというアメリカ人だ。一九三九年生まれで、五四歳という若さで故人となっている。没年は一九九三年である。

彼はエドガー・ケーシーと同じく、トランス状態で、予言を語るスタイルを持っている。

よって、実際に予言を語っているのは、ポール・ソロモンの自我ではない。さだめし、ポール・ソロモンの予言の主体は、彼の肉体を通して現れる「霊的な何者か」ということになるだろう。

といっても、ポール・ソロモンは、霊現象一点張りのスピリチュアリストではない。

なにしろ彼は、アメリカを飛び出して、奴隷状態にあった、タイの子供たちを救出しようとした人なのだ。彼はそういう現実的な、奉仕活動も行ったのである。

残念なことには、この救出活動中に負った重傷が元となり、ポール・ソロモンは、アメリカに帰国してからすぐに亡くなっている。

しかし、この自己犠牲的な活動によって、彼はノーベル平和賞にノミネートされた。これは率直に尊敬して良いことだろう。

そうしてみると、ポール・ソロモンという予言者は、かなり信頼に値する人物だと言える。

予言の確度

さて、肝心の彼の予言についてである。

ポール・ソロモンが亡くなって二〇年以上たつ。そして一般的に言って、過去に語られた予言は、現在にとっての既成事実となる。予言が外れれば外れたで、それも「外れた」という既成事実となる。

そういう観点からすると、彼の予言は、細かく見れば、外れていることも多い。

しかし、時期的なズレを度外視すれば、ポール・ソロモンの予言は、そうとう的確に、後世の世情を掴んでいたように思われる。

なんと彼は、リーマンショックを思わせるような金融危機や、I Sを思わせるようなテロの隆盛まで、一九九一年の段階で語っているのである。

つまり「細部ではズレを見せるが、本質的な部分は見誤っていない」というのが、ポール・ソロモンの予言に対して、我々が与えるべき正当な評価なのである。

事実、その俯瞰的な見識の的確さに、ポール・ソロモンの「予言者としての存在感」が、昨今じわじわと増してきた。

そのため、今さらながら、インターネット上で注目を集め出した、というのが、彼の

今についての実情なのである。

日本に現れる救世主

そんなポール・ソロモンが、やがて日本に現れるという、救世主についての予言を行っている。

というのも彼は、日本人から「日本の未来についての予言」を求められたのである。それは彼が日本のテレビ番組に出演した際のことである。

彼はトランス状態にあって言う、

「私たちは日本から光が来ると言いました。そして世界の啓蒙を助けるだろう」と。

さらに「ヒントだけなら良い」として、来るべき救世主について、四つの具体的情報を語った。すなわち、救世主が持つという、四つの特徴についてである。

分かりやすいように、箇条書きにして示すことにしよう。

- (1) 日本の北部にいる。
- (2) 一九九一年の時点では、若い男性。まだ準備が出来ていない。
- (3) 愛を説く。すべては一つという教えを説く。
- (4) アオキという師から武術を学んでいる。アオキ自身、ある種の哲学を説いている

(2) 四つの特徴に対する考察

(1) 日本の北部にいる。

ポール・ソロモンが予言した救世主を、とりあえず私であると仮定して検証してみよう。

まず、私が日本人であることは動かない。そして私は茨城県出身である。茨城は、日本列島全体からすると、明らかに北のほうにある。

すでに「関東地方の東北」と呼ばれている茨城である。あまつさえ、奈良県あたりを日本の地理的中央と考えれば、茨城県は、間違いなく「日本の北部」に属しているだろう。中央部ではありえないし、まして南部では到底ありえない。

ついでに言うと、日本の北部に向おうとすれば、列島の形状からして、東にも向かうしかない。ゆえに日本の北部は、しぜんと「東北」になる。

(2) 一九九一年の時点では、若い男性。まだ準備が出来ていない。

一九九一年というのは、この救世主予言の収録年である。それはポール・ソロモンの、日本のテレビへの出演年でもあった。

かかる一九九一年の時点では、私はまだ高校生だった。つまり、紛れもない「若い男性」である。そして、そのような若輩であれば、当然のこと「救世主としての準備」など、出来ている訳がない。

というより、当時の私では、救世主の“き”の字も思い浮かばなかったに違いない。それは、むしろ当たり前のことである。

たしか当時の私は、女性恐怖症の苦しみに、足掻きもがいていたはずだ。それは私の人生のなかでも、とりわけ暗くて惨めな時期であった。

(3) 愛を説く。すべては一つという教えを説く。

いまの私は「再臨のキリスト」を自認している。そして、イエス・キリストが説いた教えが、何よりもまず「愛」であったことは、誰しも認めるところであろう。

また、私の思想を支えるもう一方の雄である錬金術には、次のような言葉が残されている。

この中心点によって自らを全き一つのものに統一しなければならない。

そうすれば中心点は、あらゆる不完全さと病気から解き放たれ、**原初の一なる支配の状態**へと再生させられるだろう（ドルネウス）。

ユング『結合の神秘』池田紘一訳より

さらに私は、最も対照的な宗教である「仏教」と「キリスト教」を一つにした。それらが「完成された宗教がもつ、二側面のベクトルの現れである」という神学によって。

これをもって「すべては一つという教え」と呼ぶことも出来るだろう。

こうした神学が生まれる土台は、もしかしたら、本地垂迹説的な宗教観かもしれない。きわめて日本的な思想であるが、本地垂迹説は、まさしく「全ての宗教を一つにできる」考え方である。

さて、ここまではよい。ここまでは、予言をそのまま自分に当てはめれば、それでスッキリと、一致という解決がついてしまう。問題は、このあとである。

(4) アオキという師から武術を学んでいる。アオキ自身、ある種の哲学を説いている。

私は、この予言にだけは、身に覚えがない。私にアオキという名の師はいないし、武術など習ったことがない。では、ポール・ソロモンという救世主とは、私ではないのか。

(3) 葵の御紋

予言ではなく、予言のヒント

いや、思考停止するのは、まだ早い。なぜならポール・ソロモンは、前述の救世主予言を、予言そのものではなく「予言のヒント」だと言っていたからだ。

むろん「ヒント」と「解答そのもの」は別の概念である。それがヒントならば、解答は、そのヒントの「まだ見ぬ向こう側」にあるはずなのだ。

少し、イメージ的に語ってみよう。

目をつぶると、私には解答を封入した「箱」が見える。固い石でできた「ヒント」という名の箱だ。そして、その表面には「アオキ、武術、哲学」と刻まれている。

そのままでは、何のことだか、よく分からない。

ところで、この石の箱には、鍵が刺さっている。この鍵を引き抜くことによって、固いはずの石の箱は、一気に崩れ落ちるという仕掛けだ。

そして、その粉碎された石の箱の中から、求めていた「解答」が、満を持して現れる、という仕組みになっている。

当然のこと、私たちは、鍵を引き抜いてみたいと思う。しかし「鍵」とは何なのか。

Kというキー

アメリカに「ケイ」という人物がいる。なんでも、弁護士、詩人として活躍しているそうだ。

だが、私が言いたいのは、彼ケイの生活がどうだという話ではない。そうではなく、私にとって重要なのは、彼の名前のスペルのほうなのだ。

彼の名は、アルファベットで「KEY」と書く。これは鍵を意味する「KEY」と、スペルが全く一緒だ。つまり「キー」と。

そして、ポール・ソロモンが“ヒント”として提示した、謎の固有名詞「アオキ」の中にも「ケイ」が存在する。すなわち「AOKI」のなかの「K」である。

「K」——私たち日本人は、このアルファベットを「ケイ」と読むのだ。

そのため私は、この「K」が、石の箱から引き抜くべき鍵として、最もふさわしい箇所に見える。「K=ケイ=KEY=キー=鍵」という、先の言葉遊びが念頭にあるからだ。

なにしろ、この言葉遊びを省略して書けば「K=鍵」になるのである。

アオキからアオイへ

そういう訳で「AOKI」から、「K」という鍵を引き抜いてみる。すると「AOI」という言葉が生じる。カタカナで書けば「アオイ」である。

このアオイが“解答”である。私たちが求めていた解答である。

この瞬間、ヒントであった石の箱は、大きな音を立てて粉碎される。

これを封印が解かれたと言ってもよい。そして、粉碎された石の箱の中から現れた「解答」が、世にも不思議なことを語り始めるのである。

なお、上記のような言語操作は、きわめて恣意的なものである。だから私も、この操作に対する「牽強附会だ」という批判は、甘んじて受け入れよう。

しかし、ポール・ソロモンの“ヒント”を、そのまま“解答”として扱っても、それによって得られる成果は、極めて少ないものなのだ。

それを実際に行った人がいる。だが、彼が見出した救世主は、何ともスケールが小さい「キリスト」でしかなかった。

すなわち彼は、武術家のなかに青木師範を見つけ、その弟子をして、ポール・ソロモンのいう救世主に見立てたのである。

それが具体的に、誰になったのかは言わない。正直、私としては少しの興味も湧かない。

というのも、そのようなマッちょ系キリストが、大きく世界を動かせるとは、私には到底思えないからである。

いかに偉大な武術家であろうと、人間が腕力で動かせるものなど、たかが知れている。

武の名門

話をもとに戻そう。私たちは「アオイ」という解答を得たのだった。

アオイ——この言葉と、私が生まれ育った「茨城県水戸市」を組み合わせよう。すると、そこに巨大な「武の名家」が現れる。

そう、徳川御三家のひとつ「水戸徳川家」である。

葵（アオイ）とは、徳川家の有名な家紋に他ならない。いわゆる葵の御紋である。そして、徳川家ほどの武士の名家であれば、そこで武術が行われていたとしても、何の不思議もないだろう。

つまり「ポール・ソロモンの予言」が求める“武術”が、ここには、この上ないほど適切に表れているのである。

水戸徳川家の哲学

水戸徳川家の代表的人物といえば、水戸光圀、徳川斉昭、徳川慶喜、の三人が真っ先に思い浮かぶ。とりあえず、彼らの業績を概観してみよう。

水戸黄門としてお馴染みの水戸光圀であるが、彼の業績の最たるものは、決して全国行脚の旅ではない。あれはフィクションであり、彼が残した業績で最も重要なのは、疑いようもなく「大日本史」の編纂事業である。

光圀が編纂を命じた、この「大日本史」は、強く朱子学の影響を受けている。そして朱子学というシナの学問の枢要は「統治の正統性」を論じるところにある。

このような学究スタイルによって、大日本史はその内に「尊王思想」という考えを形成していった。これは要するに、徳川幕府ではなく、天皇家を、日本統治の第一の礎とする考え方である。

次に徳川斉昭を見てみよう。彼は「幕末は水戸に始まり、水戸に終わる」と言われるときの「幕末の先鞭」にあたる人物である。

そんな斉昭の思想は「尊王攘夷」だった。すなわち「天皇を尊び、外敵を追い払う」ということである。

ただし斉昭は、天皇を尊びつつも、徳川家の親藩である「水戸家の当主」としての自

覚も強かった。それゆえ外敵を追い払うために「尊王倒幕」を行おうとは、最後まで考え付かなかったのである。

幕末の徳川幕府に、外国勢を追い払う力など、もう残っていなかったのにも関わらず。

時代転換の哲学

斉昭が思い至らなかった「尊王倒幕」を、自己存在を生贄にしてまで成し遂げたのが、斉昭の子であるところの、徳川慶喜である。彼は言わずと知れた、徳川家最後の将軍だ。

時代は、慶喜が尊王を貫くためには、自身が率いている徳川幕府を「我が手の内から」手放すことを要求した。その形式が「大政奉還」である。徳川幕府は、慶喜によって、大政奉還によって、ついに引導を渡されたのである。

これによって、慶喜の尊王が徹底されることになる。遡れば、水戸光圀による尊王思想のイデーが、ここに最終的な形を得たのである。

私は、このような水戸徳川家から「時代転換の哲学」を学んだ。とくに、最後の将軍である徳川慶喜には、深い共感を覚える者である。

そこで次の章では、私が「慶喜から、どんな哲学を学んだか」について書いていきたい。

第 10 章 奉還と恭順

（１）慶喜が背負ったもの

最後の将軍

徳川慶喜は、三百年続いた徳川幕府の「最後の将軍」となった。

彼が将軍となった目的は「幕府の立て直し」のはずだった。が、諸外国による日本の植民地化を阻止するためには、もはや幕府の立て直しは諦めるべきだった。

というのも、幕末の徳川幕府には、諸外国と対峙するような気概は、もう残っていなかったからである。

むしろ徳川幕府は、その政権を「薩長の連合」に明け渡したほうがよい状況にまで、立ち至っていた。薩長には、少なくとも人材は揃っていたからである。

事実、薩長には、西郷、大久保、木戸といった、きら星のように優れた人材が、勢揃いしていたのである。彼らに、日本の未来を託すよりも良い選択などはあるまい。

慶喜にも、それが分かっていた。そこで行ったのが、政権の譲渡である「大政奉還」だった。居並ぶ諸役人を前にして、慶喜は次のように言っている。

「政権は天下を安泰に治めるためのもので、本来、徳川家が独占すべきものではない」
まさに歴史的正論である。

錦の御旗への恐れ

しかし、薩長が望んでいたのは、政権の平和的委譲などではなかった。彼らは飽くまでも、徳川家を取り潰すことを、その不可欠の目標としていたのだ。

そのため徳川家宗主でもある慶喜は、薩長軍と一戦を交えるしかなくなった。勝てるはずの戦いでもあった。軍事力そのものでは、幕府軍のほうが、薩長軍を圧倒していたからである。

そんな戦いを、幕府軍の敗北に終わらせたのは、薩長軍が掲げた「錦の御旗」だった。つまり天皇家のシンボルである。薩長連合は、明治天皇を取り込んで、このシンボルの使用権利を得たのだった。

かかる錦の御旗によって、薩長軍は官軍（天皇の軍）となった。

一方の慶喜は、幼少の頃から、父斉昭によって「決して天皇に逆らってはならない」と教え込まれている。それが、水戸学の尊王思想だからである。

そして、このような教育を受けてきた慶喜が、錦の御旗を前に、抗戦を続けることなど不可能だった。

かくて慶喜は敗北し、新政府（官軍）に取り込まれることになる。

動かない慶喜

ここから慶喜の使命は、基本的に「何もしないこと」「動かないこと」になった。

というのも、巷には「慶喜を徳川家の首領にして、新政府に一矢報いよう」と考える旧幕臣たちが大勢いたからだ。よって慶喜は、自身の無為によって、彼らの望みを、何としても断念させなければならなかった。

つまり、少しでも慶喜が動けば、徳川家という「旧時代の怨霊」もまた動くのである。それによって、大規模な内戦が始まることは目に見えている。

それは当然、慶喜が、天皇の逆臣になることを意味していた。

と同時に、それは日本国のためにもならないことだった。なぜなら内戦とは「国家内部における、軍事力の食い潰し」に他ならないからだ。

食い潰せば、軍事力は減少する。当然それは国の防衛力を削ぎ落とし、外部からの侵略行為を容易にしてしまう。

ローマの滅亡と日本

古代ローマなど、まさにそうだった。

ローマは建国以来ずっと、国境外に住む、蛮族からの侵略に悩まされてきた。それでも紀元後二世紀までのローマは、その侵略を阻止できるだけ、充実した軍事力を持っていたのである。

ところが、三世紀あたりから、ローマでは大規模な内戦が繰り返されるようになる。

そして、誰が負けるにせよ、内戦で負けて死ぬのは、決して「国外の敵」ではない。死ぬのは例外なく、多くの「ローマの軍人」なのである。

結果、この頃のローマでは、国家の総計的な軍事力が、すっかり減衰してしまった。当然のこと、国家としての防衛力もガタ落ちとなる。

五世紀、国の防衛力が落ち切った頃、ついに「侵略しにきた蛮族」に国土を乗っ取られ、ローマは永遠に滅ぶことになる。世にいう、ゲルマン民族の大移動というやつである。

つまりローマは、単に「蛮族の侵入によって滅びた」のではないのだ。むしろローマは、内戦によって疲弊し「蛮族の侵入を防げなくなって」滅びた国なのである。

そして、幕末から明治初期の日本もまた、このローマと同じような状況下にあった。当時の日本は、明らかに諸外国から「新たな植民地候補」として狙われていたからである。

これで、もし慶喜が内戦を呼び込んだらなら、軍事的に疲弊した日本は、ローマと同じような滅び方をしただろう。つまり諸外国の侵略、植民地化によって。

そこで慶喜は、新政府への絶対恭順を示すことにする。明治期には、隠居として、ただただ趣味に没頭する日々を送った。

つまり慶喜は、内戦に繋がるような政治的野心を、完全に放棄したのである。それは誕生して間もない新政府にとって、最もありがたい政治的対処だった。

（２）歴史的な役割

魅力に乏しい男

ざっと徳川慶喜の人生を辿ってみた。

ただし、これは最新の歴史研究を、反映しているものではない。それを、あらかじめ読者に断っておきたいと思う。描写も緻密ではないし、むしろ、従來說に倣った粗めの素描、と言っている程度の紹介だったと思う。

とはいえ慶喜は、あまり接近したり、緻密に見たりしないほうがいい人物なのだ。慶喜という人は、そのほうが、その「歴史的役割の輪郭」が正確に浮かんでくるタイプの人物だからである。

というより彼の場合、その姿を、ある程度遠くからぼんやり眺めたほうが、その「見るべき像」が、ちゃんと目に映ってくるのだ。この点、一九世紀フランスの、印象派の絵に似ていなくもない。

事実、彼の事績を詳細緻密に追った、NHKの大河ドラマ『徳川慶喜』など、もはや駄作と言うしかなかった。それは「盛り上がるべき後半」になればなるほど詰まらなくなる、世にも稀有な大河ドラマだった。

しかし、それは主演の本木雅弘氏が悪いのでもなければ、演出家が悪いのでもない。ひとえに、慶喜その人に、魅力がないのが悪いのである。

事実、キャラクターとしての慶喜は、けっして魅力的な人物とは言えないだろう。

何より、尊大なわりに根本的な自信がなく、どこか芯が脆い感じがするのだ。そのせいか、彼の巧緻な弁論も、いつも、どこか嘘くさく、不誠実に聞こえてしまう。

だから傍近くでは——テレビ画面を通したものであっても——見ていられないし、聞いていられない。

神の役には立った人物

しかし、大局から見た慶喜の「歴史的役割」は、とても美しい。

そこには、時代の幕引き役としての魅力的な哲学がある。慶喜は、抗いがたい運命に導かれて、おそらく無意識のうちに、その哲学を演じきった。

つまり、意識的な人格としては、多々問題がある慶喜ではあったが、そんな彼が「無意識のうちには」大いに神の役に立ったのである。まるで旧約聖書の『士師記』に登場する、あのサムソンのように。

そして、慶喜の「幕引きの哲学」の中心にあるものこそが「奉還と恭順」である。

「権力を与えられても、その権力に固執しない。だから、より正当な持ち主が現れたら、一度自分の手に握った権力であっても、それを、お返し奉ることが出来る」

「そして、いったんお返ししたならば、もう二度と揺り返しが来ないように、出来得るかぎり、自分を無にすることが出来る」

この二つが、慶喜が残してくれた「奉還と恭順」の哲学である。

家康の再来

あらためて見てみよう。

幕府の開祖、徳川家康の再来とまで言われた英傑が、徳川慶喜である。そんな慶喜には「彼ならば出来る」「彼ならばやってくれる」という、幕府復興の期待が、一気に集まった。

ところが、その家康の再来がしたことと言えば、最終的には「徳川幕府の終結と、天皇への政権明け渡し」だけだった。この肩透かしに、どれほど幕臣たちがガッカリしたか分からない。その落胆具合には、実に計り知れないものがあるだろう。

しかし、それは日本のためには、なることだった。慶喜の決断は、内戦によって日本の国力を削ぐことなく、日本の国体を、より強固に再構築したのだから。

慶喜は、まるで「日本のためになること」を宿命づけられたかのような存在だった。そして、その宿命を彼自身が、ある程度、予感的に知っていたかのようなだった。

ここから新政府への「絶対の恭順」という姿勢が生まれる。それは徳川の旧家臣にとっては、実にふがいない、物足りない態度だっただろう。

しかし、そうであればこそ、慶喜の「恭順」の態度は、さらに徹底する。彼はもはや、趣味人としての顔しか、人々に見せなかった。

そうやって「新政府への貢献」を続けた甲斐はあったらしい。晩年の慶喜には、しばし政界に戻る機会が与えられたからだ。

しかし、それは歴史的にみれば、せいぜい“おまけ”のようなものに過ぎない。

よって、慶喜の人生哲学を総括すれば、やはり「奉還と恭順」に集約されるだろう。

(3) 師と弟子

水戸徳川家の武家哲学

これが私の師である「アオイ」の武家哲学である。そして、おそらくポール・ソロモンが与えてくれたヒントの「解答」である。

そう、あの謎めいたヒントの解答は、まさに再臨のキリストへの指針だったのだ。何という神秘だろう！

私はここに、自分の生き筋を重ねてゆこうと思っている。なぜなら、慶喜の「奉還と恭順」は、おそらく「私が、これからすべきこと」の、精巧な雛型だからである。

すなわち、子の父に対する、再臨のキリストの父神に対する「奉還と恭順」の雛型だからである。

あらためて言うが、私は、キリスト教の教祖である、イエス・キリストの“再臨”である。それは家康の“再来”と言われた慶喜の立場と似ていなくもない。

したがって、再臨のキリストの登場を知れば、クリスチャンなら、きっと「再臨のキリスト」自身の、宗教的活躍を期待することだろう。通常感性を持った、西洋のクリスチャンならば、そうなるはずである。

これは当然であろう。西洋人にとって、宗教界の主役は、つねにイエス・キリストに他ならなかったのだから。

大権能奉還

ところが、現実には、全くそのようにはならない。

たしかに再臨のキリストは、教会から「救いの権能」を取り上げはした。彼は自分の手のうちに「救いの権能」を取り戻したのである。

ところが再臨のキリスト自身は、この「救いの権能」を少しも行使しようとしないのだ。それどころか彼は、この権能を、そっくりそのまま、父神へと明け渡してしまうのである。

これを慶喜に擬えるならば、それこそ「大権能奉還」であろう。

つまり私は、クリスチャンたちの期待を、大いにはぐらかすことになるのだ。

もちろん私は「救いの権能は、教会が持つよりも、再臨のキリストが持ったほうが相応しい」と思っている。

しかし私は、それに続けて、こうも判断するのだ。「救いの権能は、子（キリスト）が持つよりも、父神が持ったほうが相応しい」と。

この判断は、私のなかで、覆りようがないし、揺らぎようもない。

これは慶喜が、徳川幕府よりも、天皇（新政府）のほうに「政権があったほうがよい」と判断したのと、まさに一緒のことである。

私にとっての恭順

さらに慶喜は、新政府に対して、絶対の恭順を示した。前述したように、旧時代への揺り返しを防ぐためである。

それと同じように、私もまた、父神のまえに絶対の恭順を示す。つつしんで父神に従う態度を取る。むろん、クリスチャンたちの、忸怩たる思いを背負いながら、ではあるけれども。

具体的に言えば、私は決して、自分を頭とする組織を作らない。弟子を持たない。私の死後も「再臨のキリストのための教会」を作ることを許さない。

というより、本心と言うならば、私は早々に、宗教活動の第一線から、身を引こうと思っているのだ。

この福音書シリーズの殿に、第八福音書を置くこと。そこまでの私の宗教的役割の「ほぼすべて」だからだ。

それはまさに、晴天の霹靂のようだろう。突如現れて、一瞬で消えるかの如くであろう。あまりにも「ほんの束の間の出来事」でしかないだろう。

しかし、そもそもが「つなぎの王国」「インターレグナム」である私なのだ。媒介者としては、こうした在り方こそが、相応しいのではないだろうか。

パソコンやスマートフォンなどの端末機器は存在しても、インターネットという“つなぎ”には実体がない。きっと「媒介する」とは、そういうことなのだ。

趣味人として生きる

では、宗教家としての立場を退いた私は、それからどうするのだろう。

そこからの私は、明治時代にあって「純粋な趣味人」として生きた、慶喜のようでありたい。趣味人としては徹底しなくとも、せめて一芸術家として生きていきたい。

もちろん、宗教的な言葉や著作を発信することはあるだろう。美しき神の肢体を、言葉で書き表したい、という気持ちは、今後も抱き続けるだろう。

しかし、再臨のキリストという立場によって、宗教的に世界を動かすような著作は、この「福音書シリーズ」で打ち止めとなるだろう。

そこからの私は、飽くまでも「芸術家としての人生」を送っていきたいと思っているのである。

絵を描き、詩を歌い、文学をつづる日々。それは、もともと芸術家的気質を持っている私にとって、なんと明るく輝いて見えることだろう。

私はそうした日々、泣きたくなるような憧れさえ抱いてしまう。父神が許して下さるならば、そうした日々こそ、私は送りたいのである。

しかも、私が「アーティスト」であれば、である。もし私を慕って、人々が集まったとしても、それは「ファン」という言葉で片がつく。

そのように「ファン」であれば、何人いようとも、それは「組織人の集まり」では、決してない。だから、私のファンが、父神の宗教活動を、阻害するような事もあり得まい。「教祖と信者」と「芸術家とファン」では、その意識の次元が、全く違うからである。

このような生き方があることを、徳川慶喜が、私に教えてくれた。彼が描いた油絵などを見ると、より立場的な身近さを感じられて、本当に嬉しくなってしまう。

だから私は心から願うのだ。いつか彼のようにになりたい、と。

第 11 章 二匹の獣

（ 1 ）水戸＝六六六

徳川ミュージアムのパンフレット

ポール・ソロモンの予言から、徳川慶喜の哲学に至るまでを語ってきた。そして、この話の絡みから、私は自分が「茨城県水戸市」に住んでいることを明かした。

また、同地には水戸徳川家の歴史があること。その歴史のなかに、水戸光圈、徳川斉昭、徳川慶喜、という偉人が蔵されていることを語った。

このような水戸市には、江戸時代の史跡が多いが、また歴史博物館も多い。

そのような中に「徳川ミュージアム」という施設がある。そして我が家の、当時小学生だった娘が、この徳川ミュージアムを訪れたことがあった。学校の社会科見学のためである。

そして、その娘が、この施設のパンフレットを、家に持ち帰ってきてくれた。べつに手土産という訳ではない。生徒全員に対して、施設側が配ってくれたものなのだろう。

私は何となく、そのパンフレットを開いてみた。そして、そこに写っていた「水戸徳川家の遺品」の写真を見て、大変な驚きを与えられた。

そうして驚いたままで、私は、隣にいた妻に「これって何に見える？」と、写真を指さして尋ねてみた。ちなみに妻は、キリスト教になどは、まったく関心がない。

それなのに妻は、まるで、キリスト教の知識を持っている者のように、

「え、六六六？」と答えたのである。

六六六と刻まれた印籠

私が妻に見せたのは、水戸光圈の遺品である「黒地水戸蒔絵印籠」だった。あの時代劇の『水戸黄門』に出てくる印籠である。

すなわち助さんが「頭が高い、控えおろう」と言いながらかざす、黒くて小さな容器だ。本来の使い道は「薬入れ」らしい。

ただし、時代劇で使われている印籠はフォーマル仕様。他方「黒地水戸蒔絵印籠」は、光圈が、プライベート・タイムに使っていたものだろう。

それだから有名な「水戸黄門の印籠」であっても、私はその存在を知らなかったのである。

さて、私の妻は、その印籠に刻まれた模様を「六六六」と形容したのだった。

私はパンフレットを読みながら、彼女の受け取り方が、史実とは違うことを教えてあげた。もっとも、それは同時に、いまだ動揺冷めやらぬ自分自身にも、言い聞かせていた言葉なのであるが。

「この6に見えるのはね、デザイン化された『戸』っていう漢字なんだよ。そして、その戸を三つ並べて『水戸』を表したそうなんだ。三戸、み戸、水戸ね」

とはいっても、そうやって説明している私にも、それは「六六六」にしか見えなかったのだ。

いや、たぶん誰にとっても、それは「六六六」なのではないだろうか。どうか読者にも検証して頂きたい。



2022-05-29 (4) .png

獣の数字

この「六六六」というのは、『ヨハネの黙示録』に出てくる「獣の数字」である。その該当部分を抄出して、以下に示してみよう。

- ・私（ヨハネ）が見たこの獣は、豹に似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようにであった。竜はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威を与えた。
- ・獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、その数字は六六六である。

この獣の数字は、一般には「キリスト教を迫害した、ローマ皇帝ネロ」を示していると言われている。私もそうだと思っていたし、だから、それ以上の関心は何もなかった。ところが、ここにきて私は、何の前触れもなく「どう見ても六六六にしか見えないもの」と対峙することになったのである。

しかも『ヨハネの黙示録』は「獣は二匹いる」と言う。そこには、獣は一匹ではなく「もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た」と書かれているのだ。

そして、黒地水戸蒔絵印籠にも、二つの「六六六」が刻まれているのである。

私が妻に見せたのは、印籠の裏側のほうだった。そこには横一列に「六六六」という数字が並んでいるように見える。

これに対して、印籠の表側にあるのは、「六六六」を、葵の御紋と重ね合わせたような図案だった。むろん、これとて史実的には「三つの戸」ではある。

だが、やはり虚心で見たならば、大抵の人は、これを「六六六のディフォルメ・デザイン」としか認識できないだろう。

これを、水戸に生まれた「再臨のキリスト」が見たのである。私にとってみれば、それは「お前は獣でもある」という、メッセージを与えられたも同然だった。

(2) 不離の二神

キリストにして獣

たしかに私は「人の子」であり「キリスト」であるが、それと同時に「キリスト教会という、靈的聖堂の破壊者」でもある。私が下した「最後の審判」は、二千年続いた教会制度に、終止符を打つものであったからだ。

その在り方は、教会側からすれば、間違いなく「野蛮な悪」であろう。その行為は「獣の蛮行」に見えても仕方ないだろう。

だから結局のところ、私は純然たる「清浄な光の使者」的なものではないのだ。私の一面は「獣のような暴威」であり、人物像としては「血塗られた破壊者」に他ならないのである。

このアンビバレンス、すなわち両価値性は、きっと私に、終生つきまとうだろう。

というのも私は、ディオニュソスという「暗黒の虚無神」をインストールすることによってこそ、ルベドの悟りを得ることになった者だからだ。

換言すれば私は、光だけでなく、影をも受け持つことによって、赤い輝きの真理を構成した者なのである。

そして、その赤い輝きの真理である「ルベド」によって、私は、この福音書シリーズ全体を照らしている。それによって「ヘルメスの杖」を描き、それによって「最後の審判」を下しているのである。

したがって、クリスチャンがどれほど私を恨もうとも、私はそれを払いのけない。

いや、払いのけられない。それは仕方がないことだ。事実、私は獣でもあるのだから。存在を虚無に追いやる「破壊神」でもあるのだから。

そんな教会の破壊者が、クリスチャンに歓迎されるはずがない。よって私は、彼らから来る、轟々たる非難を覚悟しよう。

イエスとディオニュソス

とはいえ、イエスもまた、かのディオニュソスとは縁を切れなかったのである。

第八福音書のタイトルにもなる「エピファニー」という言葉は、神が公の場で現れることを意味する。

イエスの場合は、これが一月六日に起こったとされ、その日はいまも「公現祭」という、キリスト教の祝日になっている。

しかし、その輝かしい公現祭の日は、また「暗い破壊神の記念日」でもあるのだ。

公現祭にあたる一月六日は、そもそもディオニュソスをたたえる古代ギリシアの祝日でもあった。ディオニュソスはその日、エリスの神殿において、空の水がめをぶどう酒で満たすという奇跡をおこしたとされる。「カナの婚礼」で、イエスが空の壺をワインで満たした奇跡の逸話との類似は興味深い。

池上英洋『死と復活』より

この一致性、私には「ディオニュソスが、イエスを逃すまいと、その足にしがみついている」ようにさえ感じられる。まるで晴れた日の影法師のように。

そのようにイエスは、ディオニュソスを、自分の外側にある“影”とし、私はディオニュソスを、自分の内側にある“闇”とした。

だからイエスは「純然たる光」で、私は「光であると共に闇」なのかもしれない。

とはいえ、暗黒の虚無神であるディオニュソスは、また「死と復活」の神でもある。彼は獣的な破壊の裏側に、新しい世界の創造を隠している。

つまり、この神が立ち会えば、終末は、ただ終末で終わることなく、転換という、その創造の相をも浮かび上がらせるのである。その証拠が、本書の内容である。

（３）朱子学という獣

水戸光圀と朱子学

前節では「獣とは、ディオニュソス神の破壊性を意味する言葉ではないか」という想定で論述を進めていった。

しかし、それに加えて次のような「獣」についての解釈を施すことも可能である。

それは「黒地水戸蒔絵印籠」の持ち主であった水戸光圀——その光圀が信奉した「朱子学」がキリスト教にとっての獣となる、という考え方である。

そもそも朱子学とは、中国の南宋時代に、朱熹（一一三〇～一二〇〇）という儒学者が提唱した学問だ。

この朱子学の最大の特徴は、歴史のなかに「正統性」を見出すこと。そして、その正統性を何よりも尊重することにある。

水戸光圀は、この朱子学的観点から、日本の歴史における正統は「天皇」と考えた。これが「水戸学」の根本思想である。

正統状態と不正状態

だから武家社会が公家（天皇の勢力）を圧迫していた時代は、光圀にとっては、どうしても正統なものとは認められない。

これを具体的に言えば、まずさしあたって、鎌倉幕府は正統性を尊重していないことになるだろう。源頼朝は、政治の実権を、公家から武家へと、移し替えてしまったからだ。藤原氏は言うに及ばず、平氏もまた、自分たちと天皇家を一体化しようとした。

つまり婚姻によって天皇の親族になろうとしたのである。生活面でも平氏は、公家の真似事をしている。

だが頼朝は、決してそんなことはしなかった。頼朝は飽くまでも武士の棟梁として、純粹に武家だけを盛り立てたのだった。

私は、これは治世的に讃えられるべきことだと思っている。だが同じことが、水戸学的には「不正の状態」ということになる。

その点で、その後に天皇自身が政治を行った時代。すなわち後醍醐天皇による「建武の新政」などは、光圀によって、非常に高く評価されることになった。

当然、後醍醐天皇の忠臣であった楠木正成などは、水戸学にとっての英雄となる。

もっとも、その建武の新政は、後醍醐天皇自身の失政によって、まもなく室町幕府に飲み込まれてしまうことになる。

むろん、その室町幕府を開いた足利尊氏は、水戸学にとっての逆賊である。

そして、その室町幕府に続く江戸幕府も、光圀にとっては「究極のところでは」正統とまでは言えなかった。たとえ光圀自身が江戸幕府の支柱の一人であったとしてもである。

正統状態の成立

光圀にとっての「究極の正当性」は、政治の表舞台ではなく、『大日本史』という長大な歴史書のなかに、ひそかに表現されることになった。すなわち「水戸学の尊王思想」として。

尊王思想とは、要するに、天皇を尊ぶ思想のことである。

藩を挙げての事業となった、この『大日本史』の編纂は、なんと幕末までその執筆作業が続けられた。つまり朱子学的イデーは、生きた思想として、二六〇年間ものあいだ、その息をつないだことになる。

そして、この朱子学的、水戸学的イデーは、幕末、頼山陽により『日本外史』という、コンパクトな歴史書にまとめられることになった。

そうして、かかる『日本外史』は、幕末の知識人たちにとっての、まさに大ベストセラーになったのである。

こうして幕末に尊王思想が流布し、その尊王思想が江戸幕府の終わりと、明治維新（天皇による政治）を呼び込むことになる。

日本史は、ついに朱子学的な正統状態に達したのである。

キリスト教会と猊

このように、歴史のなかに「正統状態」を呼び込むのが、朱子学であり水戸学である。では、このような性質をもった学問が、キリスト教に適用されるとどうなるだろう。とりわけそれが「救いの権能」の所有権について適用されたならば？

その答えは明白であろう。

すなわち、まず第一に、既存の不正な状態から離れるため「教会からは『救いの権能』が取り上げられるべきだ」という主張がなされる。

そして第二には、再臨のキリストに——さらに父神に——必ずや「救いの権能」が奉還されなければならない、という結論が下されるだろう。

これは教会から見れば、間違いなく「獣の思想」である。つまり、自分たちの平穏無事な体制を覆す、野卑で粗暴な思想に他ならない。

そうだとすれば、水戸学の根本に位置する水戸光圀が、獣の数字（六六六）を背負っていたとしても、そうは不思議ではない。そして私が水戸（三戸＝六六六）に生まれることも。

インターレグナム 第四部「祈」

『ガンディー魂の言葉』 より

亡くなった者にとって、そして残された者にとっても、死は新たな門出なのだ。

浅井幹雄監修『ガンディー魂の言葉』 より

第 12 章 明けの明星の宿命

(1) 太陽と金星

輝く明けの明星

ここでノストラダムスに戻る。彼は予言詩の中でこう言う。

太陽の法と金星の法が競い合う

予言のエスプリをわがものとしながら

双方たがいに耳をかたむけないが

大きなメシーの法は

太陽によって保たれるだろう

五島勉『ノストラダムスの大予言・中東編』より

一行目に書かれている『太陽の法』は、偶然にも？ 奇縁にも？ 大川隆法氏による主著のタイトル名そのものである。ひいては、父神の教え全体を、代弁しうる言葉でもあろう。

それに対して「金星」とは、普段のノストラダムスの用法では、たいがい「ヨーロッパ文明」を指している。そして、その金星に「法」という、法則や思想を意味する語がつく。それで「金星の法」となっている訳だ。

もちろん、ヨーロッパ文明を根幹で支えているのは、イエス・キリストの教えである。ゆえに金星の法が「キリスト教的な教え」に結びついていることは動かせないだろう。

しかし、それにも増して、ここで言う「金星の法」とは、私の思想、すなわち「再臨のキリストの教え」を指しているように思われてならない。

それはなぜかという、第五福音書で明かしたように、現代が『ヨハネの黙示録』の内容が現象化する時代だからである。そして、その『黙示録』に登場しているキリストが、自分を金星に擬えているからである。

すなわち「黙示録のキリスト」は言うのだ、

「わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である」と。

明けの明星とは、金星の別名である。明け方ごろに、東の空に輝く金星を、昔から人々は、このように呼ぶのである。

もっとも、明け方のイメージは、当然のように「夜の暗闇から甦る、赤い太陽」にも結びつく。ゆえに、それはルベドの内容とも重なるだろう。

が、それでも「明けの明星」は、太陽そのものではない。それはどこまでも「金星」だけを指している言葉なのである。

ヴィーナスの星

イエスが自らをして「金星」になぞらえた事は、さらに次のイメージを膨らませることになる。それは「芸術家としてのイエス像」である。

なぜなら金星は、その美しく明るい輝きのゆえに、古来より、美の女神であるヴィーナスの名を与えられてきたからだ。そして、ヴィーナス（美）に関わる人間とは、他の何よりも「芸術家」を指し示している。

すでに第六福音書で説明したように、イエスの教えとは、芸術家的宗教家の感性に則ったものだった。よって彼は、自分の内側にある「美の規範」に照らし合わせながら、その宗教的な教えを説いたと思われる。

その点から考えると、いくら彼が「父のメッセンジャー」を自認していたとしても、である。その父からのメッセージが「美しいもの」を内包しないならば、いかな父の言葉であっても、イエスの胸には届かなかったに違いない。

となればやはり、イエス・キリストは、芸術家の星たる、金星の代理人であると言えるだろう。

そして、それは再臨のキリストである私にも、間違いなく波及している特徴である。私もまた芸術家的な宗教家であり、時代の緊張から解き放たれたら、とたんに私は、宗教家的な芸術家へと変貌してしまうかもしれない。

ゆえに、ノストラダムスの予言詩のなかで対比されている「太陽の法」と「金星の法」

は、父神と私、という対比に、置き換えられると思われる。

（２）予言との関わり方

予言で競い合う二者

そんな父神と私は「予言のエスプリを我が物としながら、競い合っている」という。

エスプリとは、フランス語で「精髓」を表す言葉だ。たとえば「その粋を集めた」という文章があったとすれば、その「粋」の部分にあたる。

つまり父神も私も、予言というものの精髓を極めたうえで、その内容を競い合っているということだ。要するに「かなりハイレベルな競争が行われている」という意味だろう。

それに続く「双方たがいに耳をかたむけない」という部分であるが、これは別に「父神と私とが不仲だ」と言っている訳ではないと思う。

互いに耳を傾けない点があるとすれば、それは、予言というものに対する態度、その対応スタイルに関してである。

それに関しては、父神と私のあいだに、たしかに「そっぽを向きあうような」明確な相違性があると言えるだろう。

予言に対する態度

それは、まずこういうことだ。

率直に言って私は、過去に語られた予言を、その成就によって活かしている。つまり自分自身が、予言を成就させた主要パーツであると、折々にアピールしているのである。

それに対して、父神は、過去に語られた予言には、それほどウェイトを置いていない。

いや、もちろん父神も、分かってはいるのだ。ノストラダムスが予言で「太陽の法」という語句を使っていることや、どうやら「別のもの」が自分を指していることなどは。

けれども父神の場合「そういう部分を殊更に強調することで、自分の教義を組み立てている」という印象はあまりない。そうした予言に言及すること自体、きわめて少ない。

これは『イザヤ書』を朗読しながら「今この予言の箇所が成就した」と言ったり、予言成就のために仔ロバに乗ったイエスとは、大きく異なっていると言えよう。

イエスの場合は、過去の予言を成就するために、自身の宗教活動を行っていた面がかなりあると思われる。

この点に関しては、私の宗教活動も同様だ。なかんずく第五、第六、第七福音書に、とくにその傾向が顕著だろう。

そもそも、この福音書シリーズ（初版）にしてからが、ダニエル予言を成就するために、二〇一七年の五月一五日から配信を始めたのである。

父神に関する予言成就

そんなイエスや私と比べると、父神の「予言成就」の宣言は、まことに慎ましいものでしかない。何となれば、大川氏が「自分自身を名指した予言」として重視しているのは、せいぜい、次の一文ぐらいのものではないだろうか。

仏陀入滅の二千五百年後に仏陀が再誕する。仏陀入滅の二千五百年後、仏陀は東の国に生まれ変わる。

大川隆法『死んでも困らない生き方』より

これはインドに残された伝説らしいが、同じような予言は、探せばきっと、いくらでも出てくるに違いない。だが、こうした予言に自身を結びつけることに対し、父神はさしたる関心や意欲を持っていないのである。

父神の未来予言

それよりは、父神は「自分自身が予言者となること」のほうを、よほど好んでいる。つまり、私たちの前に「予言者としての大川隆法」が立ち現れるのである。そのようにして、父神は、近未来や遠い未来を予測する事をこそ、いわば“本業”にしている。そうであれば、当然、父神による予言書の類も多くなってゆく。

私には何冊あるのか分からないぐらいだが、間違いのないのは、父神が、こうした予言を残すことに、とりわけ熱心だということである。

父神のような巨大霊能者であれば、そのようになるのは、当たり前かもしれない。

そして父神にあっては、かかる予言の多くが、たしかに当たっているのである。何年か前には、ドナルド・トランプ氏の大統領当選を、見事に言い当てている。しかも、あのヒラリー・クリントン優勢の、世論のさ中であってだ。

最近では、新型コロナウイルスの発生直後に「最低二年のパンデミックは覚悟しなければならない」と仰っていた。

私自身が、もっとずっと楽観的な見方をしていただけに、この大川氏の言葉には「さすがに言い過ぎなのではないか」と感じたぐらいだった。

しかし事実、予言から三年以上が経っても、コロナ・パンデミックは終息していないのである。父神の予言力、まさに恐るべしであろう。

いずれにしても、こうして見てきたかぎり、太陽も金星も、たしかに「予言のエスプリをわがものにして」はいるだろう。ノストラダムスが言うように「双方たがいに耳をかたむけない」というほどにも、その予言利用のスタイルは違っていても、である。

メシーの法は太陽が

しかし、同じノストラダムスによれば「大きなメシーの法は、太陽によって保たれる」ことになるという。

メシーの法とは、要するに「メシアの教え」であり「救世主の活動」である。これを後世まで波及させ、持続させていくのは、金星ではなく、太陽のほうだ、とノストラダムスは言っているわけだ。

それは当然だろう。なにしろ金星である私は「救いの権能」を父神に奉還したなら、そのあとは、もう宗教活動の第一線から、退いてしまうつもりなのだから。そうして退去し、芸術の世界へと戻りたいと言っているのだから。

そうであるならば「そのとき太陽だけが残る」のは、まさに当たり前のことなのである。いなくなる私としても、救世主のスピリットは、父神によって保持してもらわなければならないのである。

これは、人々の幸せを考えれば、まことに順当な考えであろう。なぜなら父神は、私

とは比べ物にならないほどの、大きな力と、高邁な見識を持っておられるからである。

しかしながら、もう一つ、私自身の問題として「金星のほうに舞台から降りたほうがいい」と思う理由がある。次にこの問題について語ってみよう。

（３）悲劇を愛する者

悲劇性と芸術性

金星である私のほうが、宗教史という舞台から退去したほうがいい理由。それは私が「人々の人生に、不幸を呼び込んでしまう性質」を持っていることである。それを示唆する文章がある。

人間の不幸が芸術というものを生み出したのであり、悲劇性こそが芸術の母なのだ。楽天性からは絶対にすばらしい作品は生まれえないと思う。

宇野功芳（共著）『新版・クラシックCDの名盤』より

まずは、この文章を書いた、宇野功芳氏について触れておきたい。

大川氏が、宗教上における私の父であるように、宇野功芳氏は、芸術家としての私の父である。

氏は、二〇一六年に故人となった音楽評論家である。私は本当に、他の誰よりも、芸術についての多くのことを、この方から学ばせてもらった。

なにより宇野氏は、私の大きな悩みを解消してくれた。

というのも私には、自分が高度な悟りを持つと同時に、どうしてもなく卑劣で淫猥であることに、よくよく悩んだ時期があったのである。ところが宇野氏は、その私の性質が「芸術家としての典型である」と喝破してくださった。

高貴と卑俗の総合

宇野氏は、名指揮者フルトヴェングラーについて、次のように語る。

ヴェスリングは著書の中でいみじくも言っている。

「フルトヴェングラーという人は矛盾だらけの性格をしていた。功名心が強くて嫉妬深く、高邁でいながら見栄っ張り、小心者でいながら英雄、子供でいて英知をそなえた大人だった」

要するに複雑な性格の持主であり、人間の高貴な面から卑俗な面までを幅広くあわせ持った真の芸術家タイプの人だったのである。

宇野功芳『名演奏のクラシック』より

つまり宇野氏は、上の文章を通して、私に教えてくれたのである。「人間の高貴な面から卑俗な面までを、幅広くあわせ持つ」ことが、真の芸術家として“必須のマインド”であるということ。

それによって氏は、宗教家としては、どうしても自分に自信を持てなかった私に「芸術家としての自己肯定感」を与えてくれた。

すなわち私に「君は、芸術家という枠の中でなら、自分らしく生きられるのだ」と言うてくださったに等しい。

それによって、ここに一人の「芸術家的宗教家」が産声を上げることになった。それはまさに、私にとって「アイデンティティの確立」の瞬間であった。

納得と共感

そうした恩人である宇野功芳氏の、

「人間の不幸が芸術というものを生みだしたのであり、悲劇性こそが芸術の母なのだ。楽天性からは絶対にすばらしい作品は生まれえないと思う」

という先の文章に、私は悲しくなるほどの「納得と共感」を持ってしまう。意識的に判断するより前に、まず、この身体をめぐる芸術家としての血脈が、氏の言葉を肯定してしまう。

つまりは、私もまた、悲劇性のなかに、人の心の「美の究極」を見いだしてしまう人間なのだ。それこそ宇野氏とまったく同じように。

そして、かのイエス・キリストもまた、芸術家的宗教家だった。この点については、第六福音書で詳しく語っているが、イエスもまた、宗教の最高原理に「美」を置いていた。

そして、さきに結論づけているように、「美」が最高度に輝くのは、悲劇性の中においてなのである。むろん悲劇性を生むのは、人の不幸であろう。

とすれば、である。芸術家的宗教家は、自分が求める「美」のために、無意識のうちに「人々の不幸」を呼び込んでしまうかもしれないのだ。

私が最も恐れるのは、まさにこの点なのである。

事実、イエスのキリスト教には、明らかに、受難礼賛の気分が含まれている。そして、かかる受難礼賛を換言すれば「自ら不幸を呼び込む性質」に他ならない。

これは、教祖であるイエス自身が、美と悲劇性を「芸術」として、最高度に体現した人だったからこそ、生じた問題であろう。

つまり、クリスチャンたちの「イエス的芸術への憧憬」が、いつの間にか、彼ら自身の「不幸を呼び込む性質」に転換されてしまっているのである。

かくしてキリスト教の歴史には、暗くて悲劇的な情景が、横溢することになる。たとえばローマ時代、クリスチャンたちは、自ら進んで、自ら求めて、あの残酷な「殉教死への道」を辿ったのだった。

〔ローマにおける〕一般社会の市民たちの多くがキリスト教徒に嫌悪感をおぼえた事柄が（中略）激情的なまでの熱狂性と、死を恐れず、ときにそれをのぞみさえする態度であった。

〔当時のキリスト教徒たちの〕殉教願望の究極に、イエスの死のさまと等しくなるということがあったことはたしかである。

松本宣郎『ガリラヤからローマへ』より抜粋

ドラマを求めない父神

悲劇性を求めるがゆえの受難礼賛。芸術的な美のための不幸の呼び込み。それはイエスにとっても、またクリスチャンにとっても「無意識的な心のメカニズム」の帰結だった。彼らは「自分では気づかないまま」それをしていた。

しかし、再臨のキリストである私は、宇野功芳氏の言葉を契機にして、意識上で、このメカニズムに気づいてしまった。

そして、知ってしまった以上は、黙ってなどいられないのだ。

すなわち、この「美のために、不幸を求めてしまう気質」を、新しい時代の宗教史に、流れ込ませる気になど、到底なれないのである。

もしそれをやったら、間違いなく私は、生きていては無論、死してもなお、いつまでもこれを後悔することだろう。

他方、こうした私の芸術家気質に対して、父神は、まさにそれと正反対の気質を示す。

というのは、大川隆法という方は、かの美も芸術性も、自身の視界の「外側」に置いておける人なのである。ただし、そうすることが人々が幸福につながるならば、であるが。

少なくとも父神は、美や芸術を、自分の宗教の中心主題にすることはないだろう。

とどのつまり父神は、芸術家であるよりも、はるかに総合的な「宗教家」なのである。

そして、これからの時代は、そうしたニュートラル（中立的）な宗教指導者にこそ、導いていてもらいたい。そのように私は思う。

私は一歩引き、少しだけ離れたところから「太陽の優しい光に照らされた人々」の幸せを願っていたい。金星である私は、衷心からそのように思うのである。

第 13 章 転換の福音

（１）第六福音書の続き

途切れた福音

第六福音書において、私は「エヴァンゲリオン」というタイトルの章を設けた。エヴァンゲリオンとは「福音」「よき知らせ」を意味する言葉である。そこで三つの福音を語ったのだが、その内容は次のようなものだった。

第一の福音——罪の子は神の子である。

第二の福音——人はつねに、キリストの体に乗っている。

第三の福音——終末が転換に変わる。

このうち、第一、第二の福音は、その内容に、ちゃんと完結性を備えている。第六福音書上梓の時点で、言うべきことは言い尽くされている。

しかし、第三の福音に関しては、その内容が「転換をテーマとする」第七福音書と重複することになる。そのため第六福音書上梓の時点では、どうしても「本来の福音の予示」という意味合いしか、持たせられなかった。

これはシリーズの構成上、致し方ないことであろう。第六福音書における「エヴァンゲリオン」の終わりも、次のように締めくくられている。

その福音（＝第七福音書）

が語られる瞬間も、

いまや間近に迫っている。

あなたは、ほんの少しだけ待たれよ。

決して、長らく待たせたりはしない。

これをもって私は、

再臨のキリストによる、

第三の福音とする。

中途仕事の完結

もちろん「本来の福音」とは、本書において、私が語ってきたことの全てである。終末が転換に成り代わり、子は父に「救いの権能」を返還する。そうして父による「新しい時代」が訪れる。それが本来の福音である。

とはいえ、それは「キリストが直接、クリスチャンに“よき知らせ”を語りかける」という体裁は取っていない。つまり、第六福音書における「エヴァンゲリオン」の書式ではない。

たしかに本書は、硬質な「論文」とまでは行かない作品である。どこか幻想的な内容を含んだ、ゆるい作風の論述作品と言ってもよいだろう。しかし、やはりある程度は、論述的な形式を持っている、と言わざるを得ない。要するに「詩」ではない。

そこで私は、この場を借りて「第三の福音」を、詩形でもって、読者に告知知らせたいと思う。あるいはクリスチャンに向って、詩で「よき知らせ」を語りかけたいと思う。

そうして中途だった仕事に、きちんとした完結性を与えたいと思うのである。

（２）第三の福音

かつてと変わらぬあり方

クリスチャンたちよ、

どうか知ってほしい。

私からの「よき知らせ」は、

基本的には、

二千年前のそれと、

全く変わっていないことを。

今も昔も、私の福音は、あなたがたを、

私の父に引き合わせるための、

媒介、あるいは仲立ちの言葉だった。

そして、二千年前には、

父は霊的な存在であったから、

私は霊能をもって、あなたがたに、

父からのメッセージを

伝えることとなった。

しかし、現代においては、

父は、肉を伴って、

地上にその御姿を現した。

そうして、私以上の真実性をもって、

「神の人間化」という

奇跡を成し遂げられた。

よって私は、霊能を用いるまでもなく、

ただ、この手で指し示すことによって、

あなたがたに、

父の所在を伝えることをした。

それによって、あなたがたを、

父に、直接引き合わせるためである。

父の人としての名

あなたの眼前に立ちし、わが父の名、

現世における父の「人としての名」は、

大川隆法という。それはおそらく、

神仏を起源とする法が高まり、

それが大河となって流れゆく、

そうした意味を含んだ、

名前だと言えるだろう。

かかる大川氏は、もう何十年も前から、

「幸福の科学」という

宗団を組織されている。

そして、その宗団の活動内容は、

宗教の枠を超えて、いまや政治の分野、

教育の分野にまで及んでいる。

ごく客観的に見ても、幸福の科学は、

すでに、

日本で最大の新興宗教団体である。

その足跡は、日本の宗教史の中に、

もはや揺らぎようもない

存在感を刻んでいる。

しかし、この日本という国は、

宗教そのものに

シンパシーを持っていない。

そのため、大川氏や幸福の科学は、

ときに不当に排斥されたり、

ときに誤解を受けて

揶揄されることもある。

霊的に盲目であるということは、

何という悲しいことであろうか。

しかし大川氏は、

真実に「神のごとき人」である。

イエスが、かつて「天なる父」と呼び、

私が「父神」と呼ばざるを得ないほど、

どんな霊的存在にもまして、

偉大なる方なのである。

私は、この偉大な方に、

あなたがたを引き合わせるために、

この時代に「再臨のキリスト」として、

まさに宿命的に生まれてきた。

生まれ、キリスト教を完成させ、

終結させ、そうして「転換」という、

輝く「出会いの扉」を開いたのである。

実に、この事こそが

最大にして最重要の、

「再臨のキリスト」としての、

私の役割だったのだ。

父神の宗門をくぐれ

クリスチャンたちよ、

私は、あなた方に対して、決して、

次のように言うつもりはない。

「これを機に、キリスト教を捨てなさい」

「新しい信仰のために、

今ある聖書を捨てなさい」

などとは。

あなた方は、寸毫も迷うことなく、

キリスト教の信仰を持ったまま、

父神がつくった宗教団体である、

幸福の科学の宗門をくぐりなさい。

父神は、それを許してくださる。

だから安心に安心を重ねなさい。

というのも父神は、

すべての既成宗教を包含するだけの、

まことに巨大な霊的空間を、

その心のうちに持っておられるからだ。

そこには、キリスト教のレグナムが、

すなわちキリスト教の王国が、

そのまますっぽりと、

建国できるだけの広い土地がある。

だから、わがクリスチャンたちよ、

完全なる安心のうちにあって、

キリスト教の信仰と、

聖書を抱えながら、

幸福の科学の宗門をくぐりなさい。

むしろ、あなたがたが、

これまでキリスト教を奉じていたなら、

父はなおさら、あなたがたの来着を、

心から歓待してくれることだろう。

というのも、ある霊人の一人が、

次のような言葉を残しているからだ。

「幸福の科学の教義の三割ぐらいは

イエス・キリストから

来ていると聞いています」

これほどにも、父神とイエスとが、

親しい関係にあるというのならば、

クリスチャンたちよ、

どうして、あなた方が父神から、

歓迎されないなどという事があろうか。

そう、そんな事はある得ないのである。

だから、あなたがたは、

心の底からの安らぎをもって、

父神のもとへと歩いていきなさい。

仏教的なる教え

ただし、父神が説く教えは、

基本的には、仏教的なる教えである。

それは「人間の神化」たる、

「←」のベクトルを体現する教えであり、

あなた方が、これまで学んできた、

キリスト教の教えとは、

あまり馴染まないものではある。

なにしろ父神は、

かつてインドにおいて、

釈尊として生まれた方なのだから、

それは当然と言わなければならない。

しかしながら、

「キリスト教」と「仏教」という、

この二つの世界的宗教の、

教義上の齟齬を埋めるためにこそ、

私の福音書の「第一」があったことを、

あなた方は、今こそ思い返しなさい。

この福音書シリーズが

始まるにあたって、

私が最初に説いたことは何であったか。

それこそ、「←」と「→」という、

二つのベクトルの相補性であり、

それら二つのベクトルが、

完成された宗教の次元においては、

元来一つのものであったという、

その単純な摂理ではなかったか。

であれば、だ。

私という媒介者に

教導されたあなた方には、

何一つためらうことなく、父の教説に、

向かっていくことが出来るはずなのだ。

父神のもとへ行け

ゆえに臆することなく行け。

安寧のうちに行け。

クリスチャンたちよ、父神のもとへ。

地に降りたる「天なる父」のもとへ。

幸福の科学、大川隆法氏のもとへ。

そしてまた、私の福音書のなかに、

神の計画と奇跡とを見いだした、

すべての者たちにも告げよう。

あなた方も、また行きなさい、と。

行きなさい、わが父神のもとへ。

あなた方が、

後世から讃えられるように。

その見識を、今は何と言われようとも、

後世の人々からは讃えられるように。

かくしてこれが、

再臨のキリストによる、

第三の福音である。

第 14 章 父への祈りと星の声

（１）父神への祈り

子としての義務

最後に祈ろう、父に。

父よ、二千年前のイスラエルでは、

あなたの声を耳に出来たのは、

世界で唯一、私だけでありました。

だから私は、

この口と行いをもって語り、

人々に、

あなたの道を説いて歩いたのです。

しかし、この時代にあっては、

地上のあらゆる人々が、父よ、

あなた様の姿を、

その肉の目をとおして、

じかに見る事が出来るのです。

あなた様の教えを、

その肉の耳をとおして、

じかに聞くことが出来るのです。

本当に、隔世の感を禁じえません。

このような時代にありながら、

父よ、

私が巨大な霊能力を駆使して、

あなたの姿を、あなたの教えを、

人々に媒介してあげる必要が、

果たして、僅かだにもあるでしょうか。

私には微塵にも「その必要はない」と、

そのように思われるのです。

この時代に必要なのは、父よ、

ただ迷える人々に向って、

あなたの所在がどこにあるのかを、

この右手をもって、確信をもって、

指し示すことだけではないでしょうか。

それだけが、あなたの「子」の、

聖なる義務ではないでしょうか。

救いの権能を取り戻す

しかしながら、

単なる一介の信仰者の言葉であっては、

この時代の人々は、

そのような“指し示し”には、

決して耳を傾けはしません。

それだから父よ、私は人々が、

この声に聞き従うだけの、

確固たる権威を持つとしたのです。

そのためにこそ、あの、

「救いの権能」を取り戻したのです。

それは、かつて生前のイエスが、

弟子のペテロに対して、

「天の国の鍵」という形でもって、

まるで形見のように与えたものでした。

イエスは、ペテロに向かって言いました。

「私はあなたに、天の国の鍵を授ける。

あなたが地上でつなぐことは、

天上でもつながれる。

あなたが地上で解くことは、

天上でも解かれる」と。

これこそは、まさに絶対なる、

「救いの権能」でありましょう。

そして、かかる救いの権能は、

初代教皇としてのペテロを通して、

キリスト教会に引き継がれました。

父よ、あなたもご存じのとおり、

教会は、ときにこれを誤用し、

ときには悪用し、きわめて稀には、

これを正しく使いました。

彼らに、その使用の資格があったのか、

正直言って、私には分かりません。

ただ間違いないのは、長い間、

それは教会の持ち物だった

ということです。

しかし私は、最後のペテロの時代、

再臨のキリストとして、

この「救いの権能」を、

キリスト教会以上の、

正当なる所有者として、

この手に取り戻したのです。

さらに正当な所有者

とはいえ、この「救いの権能」は、

そもそも一体誰が、どなたが、

あのイエスに与えたものなのでしょう。

これは、実に分かり切ったことです。

そう、父よ、それは疑いようもなく、

あなた様であるのです。

ゆえに、再臨のキリストである私が、

「救いの権能」に関し、

キリスト教会以上に、

正当な所有権を持っていたとしても、

です。

父よ、さらにあなたは、

そのキリストをも上回る、

正当な所有権を、

「救いの権能」に関して、とこしえに、

お持ちでいらっしゃるのです。

そうです。

教会よりも、ペテロよりも、

イエスよりさえも、さらに遡って、

あなた様は、おおもとの、

「救いの権能」の、

所有者だったのですから。

奉献ではなく奉還

よって私からの、あなたに対する、

かの「救いの権能」の奉献は、

本質的には、結局

「奉還」に過ぎません。

つまり、捧げ奉る以上に、

その最も真実の意味において、

これは返却、返納であるのです。

法的理念によって私は、

これを、あなたに返すことを、

“しなければならない”のです。

だから父よ、どうか躊躇うことなく、

淡々とした手つきでもって、

この「救いの権能」を、

その懐にお受け取りください。

そして、どうか救ってください、

迷える

二十億人以上のクリスチャンたちを。

この終末と転換の荒波に揉まれている、

迷える数多の子羊たちを。

父よ、その巨大な神力によって、

私よりも、ずっと豊かな慈愛によって、

私よりも巧みに、私より根本的に、

私よりも深く、高く、強く、優しく、

子羊たちを、救ってあげてください。

それが出来るのが、

あなたであることを、

父よ、私は誰よりも、

よく知っているのです。

(2) ヘルメス・トリスメギストス

常に傍にいてくれた父

父よ、思えばあなたは、

どんな時でも、

私の傍にいてくださいました。

あなたが、自分自身を顧みて、

「沈黙の仏陀になってしまった」

と自嘲した、あの長い沈潜の時期。

私にとっては、ユングを通して、

錬金術哲学に夢中になっていた、

あの楽しくも有益な学びの時期。

あの時にも実際には、父よ、

あなたはずっと、

私の傍の隣にいてくださいました。

むろん、あなたにとっては、

これは

言わずもがなの事でありましょうが、

錬金術の主催神は、その名を、

ヘルメス・トリスメギストス

と言います。

三倍も偉大なるヘルメス、

そういった意味合いを持った名前です。

このヘルメス・トリスメギストス、

あるいは、

ヘルメス・トートとも言われる、

この深い叡智をそなえた神霊は、

父よ、

あなたの霊的実体であるところの、

エル・カンターレの別名であることを、

私は後年、

あなたの著作の中で教えて頂きました。

別称の父からの教え

つまり父よ、私は、

大川隆法氏から離れた時期にあっても、

その実、知らず知らずのうちに、

錬金術というフィールドの中で、

エル・カンターレから、

宗教的な教えを受けていたのです。

なんと不思議で、面白いことでしょう。

ノストラダムスは、その予言詩の中で、

私たちの王国のことを、

「大いなるエルメスの系列から発して、

団結するその国」と形容しています。

エルメスとは、

ヘルメスのフランス語読み。

ですから、大いなるヘルメスとは、

ヘルメス・トリスメギストスのことを、

指しているのに違いありません。

その大いなるヘルメス、

ヘルメス・トリスメギストス

として現れた、

エル・カンターレの

教えと助力によって、

私の「人間の神化」の行程は、

滞りなく進展していきました。

そうして私は、やがて、

「人間＝神」「神＝人間」

のステージへと、

ついに到達することになったのです。

かくして私は、現代において、

「神の人間化」の別称であるところの、

「人の子となった神」あるいは、

「再臨のキリスト」となりました。

(3) イエス・キリストの霊

聖霊の名前を明かす

そして、かのノストラダムスや、
ポール・ソロモンの予言によって、
私は「再臨のキリスト」の役割が、
「大規模な転換」と、
「奉還と恭順」にあることを、
知ることになったのです。

そうならば、父よ、
「救いの権能」を奉還する相手として、
私は再び、大川隆法としてのあなたに、
改めて、向き合わなければなりません。

そして、それによって、ここに、
イエスの「放蕩息子の帰還」のような、
「父子間の別れと再会」

という主題を持つ、

つまり一つの輪を結ぶような、

懐かしい物語が出来上がったのです。

おお、それは何と何と精巧な、

神の運命の御膳立てでありましょう。

本当に、こうも見事に、

父と子の運命が、輪を描くことなど、

あり得るものなのでしょうか。

そうなれば、ここには、

私を導いている聖霊の強い意志が、

働いていると思わざるを得ません。

そして父よ、今こそ私は、この聖霊に、

ある明確な名前を与えようと思います。

してみると、この聖霊の名前こそ、

きっと「イエス・キリスト」と、

そのように呼ぶべきであるのです。

すべては一つに

父よ、あなたの宗教活動の黎明期に、

その霊的な対話の中において、

イエス・キリストの霊が、

あなた様に向って、

こう言ったのを覚えておいでですか。

「あなたがたの今回の〔救世〕計画の、

指導の最高責任者の立場にあるのは、

この私〔イエス〕であります」

「私たち〔高次元の霊〕は、

あなた方に必要なものは

知っておるのです。

その必要なものは用意しておるのです。

その必要なものが、

その時期、その時期に、

与えられるようになっているのです」

あなた方の救世計画、

いや、私たちの救世計画は、

人類の未来のために、どうしても、

成就させなくてはならない計画でした。

そうであるからイエスは、

責任者としての責務を果たすために、

私という「イエスの代理人」を、

この地上に送り込んだのです。

すべては一つに結びついている、

きっと、そういうことなのでしょう。

すべてはエル・カンターレと、

イエスの承知のもとに、

運ばれているということです。

ですから父よ、どうか私の手から、

今こそ「救いの権能」を、

その手にお受け取りください。

この世界を、隅々まで照らすために。

この世界を、悲劇から解放するために。

この世界を、

新たな世界へと転換するために。

父よ、父よ、心から愛する父よ、

来たりませ、あなた様の時代です。

（４）結びと円のほつれ

結びの言葉

かくて「七つの封印」は解かれ、

それらは

「七つの福音」となり替わった。

ここに深遠なる「神の計画」と、

「運命の神秘」を垣間見た者たちよ、

今こそ、自分がどこに向かうべきか、

その進むべき方角を見定めよ。

そこに向かって歩くことを決断せよ。

新しい時代を創るのは、

他の誰でもなく、あなた方である。

星との相聞歌

私からの追伸——

星よ、ありがとう。

ここまでの事が出来たのは、

君が、私を助けてくれたからだ。

星からの応答——

確かにそうだが、

前にも言ったとおり、

私はイエス・キリストの星である。

四月一七日の超新星である。

お前は運命の日にあって、

なお二つの

「一七の超新星」を受け取り、

一七・一七・一七という

トリスメギストスを、

大宇宙の星辰現象として、

宗教史に描くことになるだろう。

その星こそ正道よ、

お前自身の星である。

再臨のキリストによる福音書 7-II

著 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
